怪我をどう語るのか
- 本学テニス部員を対象として -

貝崎　杏子（競技スポーツ学科　スポーツ情報戦略コース）
指導教官　豊田則成

キーワード：怪我，ありのままの自分，葛藤

１．緒言

本研究は，**「本学テニス部員は怪我をどう語るのか」**というリサーチクエスチョン（Research Question：以下 RQ と示す）を設定し，質的にアプローチした．そこでは，怪我の経験の語りに着目し，発展継承可能で有益な仮説的知見を導き出すことを目的とした．

２．方法

インフォーマント（Informant：情報提供者．以下 Inf.と示す）は，怪我によるある一定期間の運動停止を経験し，現在は競技復帰をした本学テニス部員７名であった．そして一人当たり 40 分程度の半構造化インタビューを実施した．分析方法については質的研究法である複線径路・等至性モデル（Trajectory Equifinality Model，以下 TEM と示す）を用いて行った．

３．結果と考察

本研究は，RQ の基，質的にアプローチをした結果，513 個のコード，70 個のカテゴリー，35 個のカテゴリー・グループを生成した．さらにそこから 5 個のコア･カテゴリーを生成した．そして**「本学テニス部員は，受傷後，怪我を受け入れられず，周囲と比べ自分を見失う．しかし，２段階の葛藤を経験することで，自分らしさを見出すことが出来，成長を実感ことが出来ると語る」**という仮説的知見を導き出した．（Fig.1）

４．まとめ

すなわち，**怪我に伴う２段階の葛藤を経験するからこそ，自分らしさを見出すことが出来る**と言える．

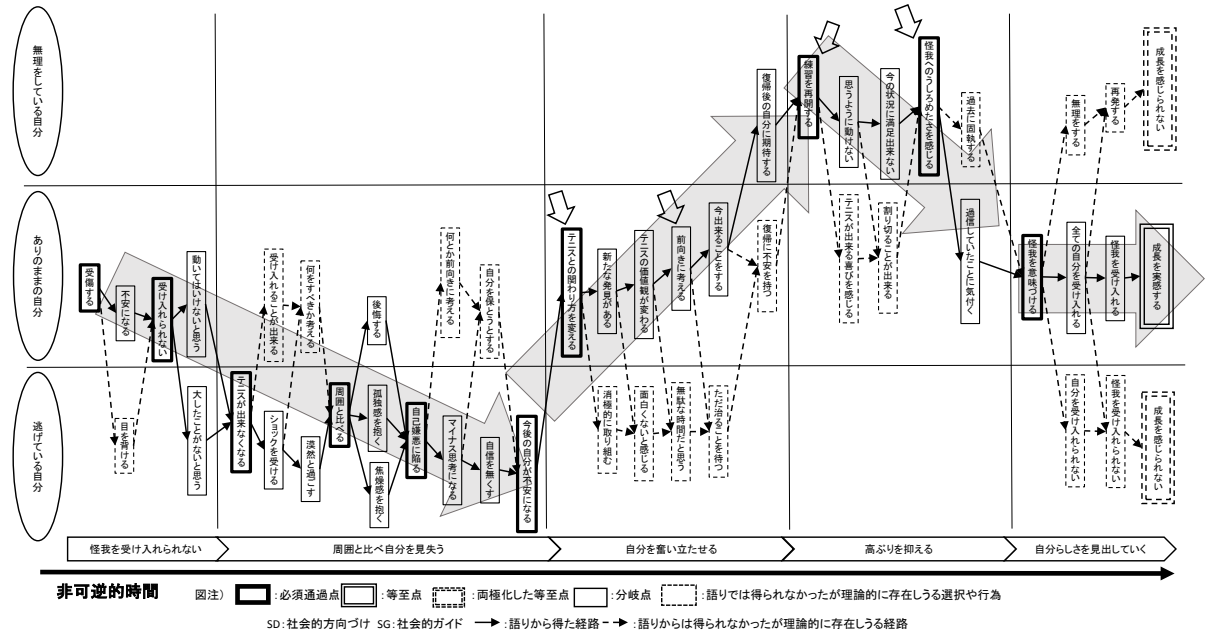

Fig.1：怪我に伴う2段階葛藤プロセス